

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	ミュッセの劇作における「二面性」(doublement)について : 「ロレンザッチョ」(Lorenzaccio)を中心として
Author(s)	小笠原(政広), 洋子
Citation	フランス文学 , 8 : 78 - 83
Issue Date	1966-07-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040880">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040880</a>
Right	
Relation	



# ミュッセの劇作における「二面性」 (doublement) について

——「ロレンザッチョ」(Lorenzaccio) を中心として ——

小 笠 原 洋 子

本稿は、「ミュッセの劇作における二面性について」の一考察である。まず始めに、二面性ということについて簡単に記述すると、放蕩に身をゆだねる汚れた存在と、清いものを求めようとする美しい存在が共存し、人間を悩ましている姿を意味する。これは、人間誰にもあることかも知れない。しかし、ミュッセの場合、特にとりあげなくてはならない理由は、まず二面性をまぬがれ得ないミュッセ自身が特異な心理分析の才能を持っていたがために、特に自己の二面性に悩まなければならなかったこと、次にそれがとりもなおさず、彼の詩的靈感であり、彼の作品を構成する主題の一要素であり、彼の作品において、特異な魅力を感じさせずにはおかない抒情味であるからである。次に、こうした二面性が劇作「ロレンザッチョ」(1834年作)を頂点としてしだいにみられなくなり、すなわち、ジョルジュ・サンドとの愛の破滅ののちの作品においては、しだいに一面化していき、作品のうえでは、かつての放蕩も嘲笑も侮蔑もなく、ただ魂の奥深くで悩む詩人として、芸術家としてのミュッセの一面がみられるのみであり、詩人として理想の世界に到達するのであるが、そうした理解のためにも劇作にあらわれる二面性をみる必要があるように思える。

元来、熱烈な芸術的気質、繊細な感受性があたえられ、さらに理想を秘めていたミュッセ自身の放蕩は、はじめは、自己の内的苦悩と戦って著作し終えた時の気ばらしであり、苦痛の慰めであり、傷ついた心の避難所でしかなかった。しかし、この仮りの放蕩において、彼が失ったものはあまりに大きく、あまりにも痛々しい人生をみつめなくてはならなかった。すなわち、放蕩において、愛における信頼も誓いも、その力を全く信用することができなくなった彼は、自分や他人に対する不信、これによる不安な疑いをもち、彼の夢みるような愛、神に捧げるように愛に身をゆだねることが不可能となったのである。ミュッセがジョルジュ・サンドとの破滅ののち、罪を感じたとするならば、こうした放蕩から生じた二面性によるもので、一時的な不忠実によるものではないように思える。

この悲劇を経験したミュッセは、恐ろしい放蕩の残した傷あとを胸に深く抱きながら、「ロレンザッチョ」において、その不吉なる影響を書き、戯れに放蕩してはならないと、彼の全身をもって訴えたのであろう。以下、二面性の理解のために、彼の劇作「ロレンザッチョ」を中心に彼の数篇の劇作を通して考察する。何故なら、「ロレンザッチョ」は、ミュッセの文学者、劇作家として最高の時期に、最もエネルギッシュな時期である1834年に書かれたものであるということ、それ以上にこの場合は、最初の劇作「ヴェニスの

夜」以来の劇作の総合を「ロレンザッチョ」にみることができるからである。すなわち、そこには、黄金のような少年時代から神聖な愛を求め悩むチェリオ（「マリアンヌの気粉れ」1833）の時代、そして裏切りを経験するラゼッタ（「ヴェニスの夜」1880）、アンドレ（「アンドレ・デル・サルト」1833）の時代を経て、愛を信じるのできなくなった放蕩児オクターヴ（「マリアンヌの気粉れ」）の時代、そしてそののちの姿ロレンザッチョ（「ロレンザッチョ」）が実に巧みに総合され、ペルディカン（「戯れに恋はすまじ」1834）が、《所詮、私達は悪をなさねばすまなかったのです。人間である私達は！・・・》と回想する。そこでミュッセが行なっているのは、とりもなおさずミュッセ自身の「自我」(moi)の分析なのである。

「ヴェニスの夜」において、ローレットの裏切りを経験したラゼッタ。それは、最初の女性に裏切られたミュッセの姿であり、「アンドレ・デル・サルト」において愛妻ルクレースと友人コルジャニの裏切りを経験するアンドレ、それは、サンドと医者パジェロとの関係を発見するミュッセであり、「戯れに恋はすまじ」におけるカミーユとペルディカンの、互に愛していながら、こうした自尊心の競争は、ジョルジュ・サンドとミュッセとの間の反映なのである。そして、「マリアンヌの気粉れ」でチェリオの崇拜にみちた盲目的ともいえる愛は、ドン・ジュアンのミュッセが、心の奥底で絶えず求めていたものである。しかし、チェリオはあくまでもそれを求めようとする時死ななくてはならなかったし、アンドレは、彼の妻ルクレースを愛し続けるためには、やはり死ななくてはならなかった。ここに愛を信じようとしないうオクターヴ、人間すべてに対する強い侮蔑の心に燃え、又自己に対しても侮蔑を覚えるロレンザッチョが生まれてくるように思える。しかし、もともと理想に燃えていたミュッセにとって、オクターヴというミュッセ、あるいは、ロレンザッチョというミュッセは安らぎうる存在ではなかった。すなわち放蕩生活の最中、眠っている無垢な子供の側を通り、わっと泣き出す。激しい呪いの中で彼を墮落させた情熱を呪う。そして再び子供の無垢な愛に帰ろうとする。しかし、再びそれをつかまえることはできないのである。放蕩の亡霊が、すでに彼をみつめ、彼をひきつけ、彼を殺してしまうのである。このことがいわゆる二面性なのである。「マリアンヌの気粉れ」において、オクターヴは、真面目な恋をすることもできない、又しようもしない若い放蕩児である。彼は女性を征服するために、時間を費やすよりも、ぶどう酒の口をあけた方がまだましだとさえ考える男である。彼は唯一の感情、友情においてのみ、その子供らしい生氣と純真な信頼の心を保持している。事実、彼は友達の若いチェリオを深く愛し、チェリオが恋い慕ったマリアンヌが、彼に愛を寄せた時、軽蔑の色をみせてこれを拒絶する程忠実であった。彼は恋を疑い、それだけに友情にあつかったのである。一方、ミュッセの他の一面を具現する若いチェリオは恋に悩む若者である。彼の恋は悩ましい崇拜の心であり、満足されない時には、死を招くばかりの激しい欲望となる。《恋と死とは、オクターヴ、手をつないでいるのです。恋は、ひとがこの世で会うことのできる最大の幸福の源ですし、死は、すべての苦痛に、すべての病気にきりをつけてくれるのです。》といている。し

かし、マリアンヌの夫、クロディーオの嫉妬の一撃でチェリオは死んでしまう。すると、オクターヴは叫ぶ、《チェリオは私自身のよき一部だった。そしてその部分はチェリオと共に天にあがっていった・・・私はもう決して愛することができない、チェリオひとりそれができたのに・・・私の抱いている愛は、夢のように酔った通行人のようだ・・・彼らが殺したのは私なのだ・・・》という、《あなたは どうして、愛よ、さようなら、というのですか》とマリアンヌがたずねる。その時、ミュッセは次のような深くきわめて真実なる言葉をオクターヴにいわせている。《私は、あなたを愛していない、マリアンヌ、チェリオがあなたを愛していたのだ》と。

ミュッセは、自己のうちに認められる二つのこうした存在を表わすために、チェリオとオクターヴという二人の人物をあたえ、(これは、「世紀児の告白」のオクターヴとデジュネ、「イディル」のロドルフとアルベールなどもそうであるが)、調子は合わないが決して離れることのできない友として示すことにより人間を描いている。このことは、ミュッセ自身の中にある二面性の関係をそのまま示しているようである。

「ロレンザッチョ」においては、まず、純粹な思考を軽蔑し、行動する人間になろうとするひとかどの芸術家と、そうあることを諦め、無駄な夢とし、行動を思いとどまる思考する人間とが、ロレンゾとフィリップという二人の人格にあたえられている。それを以下考察することにする。

《私の少年時代は黄金のように純でした！・・・ところがある夜のことです。私は昔のコリゼの廃墟に腰をおろしていました。私は、何故だったか立ち上ってしまいました。露に濡れた両腕を空に差し上げて、祖国の暴君のひとりはこの私の手で殺してやると誓ってしまったのです。私は気苦労のない学生でした。その時分には、芸術や学問にだけ没頭しておりました。どうしてああいう不思議な誓いをしてしまったのか訳が分かりません。》自分のそうした突如としてやってきた決心を、彼は、《広場で群集の間を練り歩くために台からおりてくる銅像、私はこの銅像そっくりでした。その時分には、われブルタスたらん、と昼も夜も考えるようになっていましたから。》といている。ここに行動する人間ロレンゾが生まれてくる。そして目的を果すために、暴君アレクサンドルにとり入り、非道なことをもやってのけ、多くの人々の涙を流させることにも躊躇しなかった。彼は言う、《彼らと同じ仮面を被るだけは被っていいが、どんな悪い場所にしようと汚れた着物の下には、清い心を持っていてはいけない》と。彼はこうして人生に乗りだしていったのである。しかし、彼はそこで人間というものを知ったと言っている。そして、ミュッセの他の一面をあらわす、行動をあきらめ思考する人フィリップにむかって次のように言う、《あなたは人間共の海岸に動かずに立っておられたのです。水に映るあなた自身の姿をみつめていらしゃった。孤独な生活の中から、あなたは、空の素晴らしい天蓋の下にひろがる海原を見て、立派なものだと思っておられたのです。しかし、あなたは、波を一つ一つお数えにならなかったし、おもりを投げ入れることもなさらなかった。あなたは、神様のなさることを信じ込んでおられました。だが、私はその間に人生の荒波に飛び込み、底

に沈み、硝子の潜水具をかぶって、海のあらゆる深味を隅なく探ってみたのです。それなのに、あなたは海面をみて感心していらっしゃったのです。私は、難破船の破片も人の骨も恐しい怪物もみたのです……。今のあなたは、むかしの私とそっくりでいらっしゃるし、私のしたことをこれからはさろうとしておられる……。しかし、私は人生というものを知っています。けがらわしい料理です。この世に何か尊いものがあると思召したら、この料理には手をおつけにならないで下さい。……正義の腕をもっている人間は、あなただけということが間もなく おわかりになるでしょう。」しかし、ロレンゾ自身については次のように言う。《私は、自分のやっていることに馴れっ子になってしまいました。前には墮落というものも、私には単なる着物でしたが、今では肌にぴったり糊付けになってしまったのです。……ブルタスは、タルカンを殺すために気違いの真似をしました。私があの男に驚きますのは、彼がよくもしっかりしていて、本物の気違いにはなかったということです。》

しかしながら、ロレンゾはともかく行動していく。フィリップの理想主義的な思考やロレンゾ自身の懐疑論者の衰弱しきった思考で一時とどめられながらも、ともかく行動したのである。すなわちアレクサンドル公爵を殺したのであった。しかし、彼が予見していたように、この殺人は無駄であった。これらすべてをロレンゾは予見していた。それでは、何故彼は行動したのであろうか？何故なら、彼の想像力は、彼にとって非常に力強く、しかも、ずっと以前から、何ものも彼をひるがえすことができない程、内面の必要におかされていたからである。《彼を殺す、これが、たった一つ私に残ったいいところなのです。二年このかた、けわしく切り立った岩の上で私は足を滑らしている。そして、彼を殺すということが、たった一本の草のようなもので、それにやっと爪をかけたところなのです。》すなわち、行動すること、それは自己を主張することなのである。ところで、青白い墮落したロレンゾには、とりわけ、自己を主張する必要は何もないのである。この点では、スタンダールのジュリアン・ソレルと似通っている。行動の効力は、全く精神的なものなのである。ロレンゾは、全く行動の英雄なのである。

次にロレンゾとその幻影という面から考察すると、ロレンゾの母は、ある夜、うす暗い部屋の中で窓側のテーブルについて、幼い頃の真理を愛する彼について、またかつての幸福について考えていた。そしてその時のことを思い出して、ロレンゾに次のように語る。

マリ（母）：《あの真暗な闇をじっとみつめながら、わたしはこんなことを考えていたの。昔は、あの子も毎晩一所懸命に勉強していたものだが、近頃では、明け方にならなければ帰ってこないのだったね。目に涙が一杯たまってしまった。頭をふると涙が流れるのがわかったの。ところが、ふと気がつくと、廊下を誰か歩く足音がする。振りむくと、真黒な着物を着た人が腕に本を抱えてわたしの方に向かってくるのだよ。……それがロレンゾ！お前だったのだよ。——お前、まあ早く帰ってきたねえ——って私は叫んだのだけれど、その幽霊は返事もしないで、ランプの傍へ座って本を開いたよ。昔のままそっくりのロレンジノだった。》

ロレンゾ：《本当にみたのですか》

マリ：《今、お前をみている通り、はっきりみたのだよ。》

ロレンゾ：《いつ、その幽霊は消えました？》

マリ：《お前が今帰りしなに鐘を鳴らした時に。》

ロレンゾ：《私の幽霊が！私のかえってきた時消えてしまったって！》

マリ：《幽霊は、悲しそうに立ちあがって朝の霧のように消えてしまったよ。》

以上、きわめて魅力的な抒情味があるが、このことがロレンゾの、またミュッセの深い心の痛みではなかったであろうか。苦痛であるけれども、絶えずロレンゾに去来するのは、《若い時の亡霊》であり、《もうひとりのロレンゾという同じ名前の男がいて、今ここにいるロレンゾの後に姿をかくしている》のであり、彼は《壘のようなもので、中に尊い水が入っている》のである。

このように、悲劇的あるいは無感覚になった放蕩者の心の中に、突然清い夢想がおこり、罪の独白を通して田園詩の一節をなげかけるのである。ロレンザッチョは、彼の罪をかぞえあげる。彼は、自分に対する嫌悪や人間に対する軽蔑を吐き出す。しかし、突然彼の声は変る。《ああ、何と心安らかなのだろう！門番の娘の小さなジャネットが洗濯物を乾かしているのは何とかわいらしかったことだろう！芝生の上にひろげられた彼女の下着の上に山羊がやってきて歩くのを追っばらっていたものだ。でも、あの白い山羊は、ほっそりした長い足をしていつもやってきたものだった・・・》

しかし、「世紀児の告白」において述べられている愛の亡霊が、愛することを不可能にしたように、放蕩の亡霊は、再び無垢な愛に帰ることを不可能とし、この不可能が心に残す恐ろしい空虚の悲しい告白が語られているのである。《私は人殺しの機械だった。それもたったひとりの人を殺す機械だった。》と。

このように、非常に情熱的な人間の「生」(Vie)に対する激しさと、そこにみいだされるものに対する軽蔑、永久的な魅力があり、しかも、物事のはかなさという二重の感情、こうした概念がミュッセの作品に靈感をあたえていたようである。感情的な人間の二面性というきわめて真実なる概念を、身をもってみいだしたのである。放蕩者であり清い愛をあくまでも求めようとする者、汚れた存在であり卒直なかわいい子、感覚であり心、肉体であり魂、一方がいつも他方を悩まし、お互に完全に意識することができず、しかもお互に愛し合い、お互に他を犠牲にする勇氣、力を決してもっていないのである。

以上、ミュッセの作品において、抒情味を構成している一つの大きな要素としての二面性を考察してきた。ことに「ロレンザッチョ」のごとき、歴史的、政治的あるいは哲学的ともいえる劇を、複雑な魂で精神的な劇に変えたのは、この二面性によるものであり、またロマン派劇中、最高の劇といわれ、人間の魂(âme)の最も偉大な歌い手といわれるのも、この二面性をじっとみつめ、残酷なまでにみつめ、描くことのできた唯一の人、ミュッセであればこそであろう。そして、それがわれわれにあたえるものは、絶えず本質的なものに志向する真摯な魂、自己の最深部にあるものをしか主題としない絶えざる努力が認めら

れるのである。この努力は、一連の「夜」の詩を始めとする彼の多くの詩の主題に続くものである。ジョルジュ・サンドとの愛の破滅ののちに書かれたこれらの詩には、興奮も絶叫もなく、魂の奥深くで苦悩する詩人の姿のみが見うけられるのである。ミュッセのこれらの作品から理解されるように、サンドとの離別、それに続く痛ましい苦悩は、欺瞞と裏切りに対する憎悪を深く胸に抱くにいたらしめ、かつてドン・ジュアンとしてふるまっていた頃の、彼の感情的な荒廃を装う虚勢的な態度を棄て去るにいたらしめたのである。そして、この時期に、彼がどんなに彼を悩ました偽りの仮面を投げ棄てるのに戦い苦しんだか、作品の中に、ことに「ロレンザッチョ」の中にみることができるのである。こうした意味において、すなわち、劇作から詩への、二面性から一面性への彼の過渡期の作品として、最も全身をうちこんだ作品として、ミュッセ自身のもつ二面性、作品への自己没入の最も顕著なものとして、彼の必要かくべからざる作品として、「ロレンザッチョ」を評価したいと思う。

(旧姓 政広)

#### 参 考 文 献

- (1) Philippe van Tieghem: 《L'homme et l'œuvre》
- (2) P. Gastinel: 《Le romantisme de Musset》
- (3) Maurice Allan: 《Alfred de Musset》
- (4) Emile Faguet: 《Dix-Neuvième Siècle》
- (5) Henri Lefèbvre: 《Musset-Dramaturge》 (L'Arche)

(註) 論文中の「ロレンザッチョ」の引用文はすべて下記の翻訳書によった。

「仏蘭西近代戯曲集」(新潮社出版)のうちの「ロレンザッチョ」(アルフレッド・ミュッセ作渡辺一夫訳)